



2021

光道園 レポート

光道園の“原点”を理解し、“現在”を知り、“未来”を描く

令和3(2021)年度の『光道園レポート』のコンセプトは、「持続可能」です。新型コロナウイルス感染症は終息することなく、一時的だと思われていたマスク着用やフィジカルディスタンスをとる生活様式は、「日常」になりつつあります。

私たちは、この1年を「コロナだから、あきらめる」ではなく「この日常でも、できる」という言葉で取組みを捉えなおし、利用者の方の望むくらしの持続のため歩み続けました。また、かかわりが制限される今、光道園を信頼し、かかわりを継続いただく皆様の支えを改めて実感しています。地域で安心して住み続けられるまちづくりの使命を胸に、社会福祉法人として「今」そして「これから」のくらしを創っていきます。

私たちは本年次報告書(アニュアルレポート)の企画編集において、読者の皆さんに届けたい内容を「ストーリー(物語)」と捉えました。年次報告書(アニュアルレポート)とは本来、経営的な数字を報告書としてまとめたものですが、私たちはその数字の背景にある一つひとつの「ストーリー」に光を当てることで、改めて自分たちの仕事の価値に気がつきました。その「ストーリー」を自分たちの言葉で語り、届けることが職員である私たちの成長であり、福祉の力で地域の未来をつくる大切なプロセスだと思っています。

この『光道園レポート』を手にとった皆様が「光道園らしさ」に共感し、「光道園を応援したい!」とファンになっていただけるよう、この1冊に私たち職員の仕事にかける情熱と福祉のプロとしての誇りを込めました。

詳しい解説は、光道園の職員から是非お聴きください。職員一人ひとりの想いのこもった言葉で、「光道園らしさ」をお届けします。この1年のストーリーを詰め込んだ、『光道園レポート2021』をお楽しみください。

園訓

愛なき人生は暗黒であり、汗なき社会は墮落である。

自らも全盲という障害を持ちながら、広く全国の障害者のために光道園を設立した初代園長「中道益平」が、生涯を通して貫き通した精神である。

私たち光道園職員は、この言葉を「光道園精神」として、いついかなる時も、社会情勢が如何に変わろうとも、継承し実践してゆく。

目次

『光道園レポート』コンセプト/園訓/目次	1
理事長あいさつ/令和3(2021)年度 基本方針	2
令和3(2021)年度の法人ハイライト	3
光道園の取組み	5
施設・事業所紹介 障害事業	7
施設・事業所紹介 高齢事業	14
施設・事業所紹介 事務局	17
「10」の数字で見る	19
光道園'sストーリー	21

未来へ

社会福祉法人光道園 理事長 荒木 博文



世界的な新型コロナウイルスの感染拡大の終息が未だ見えない中、私たちの日常は、感染症予防を前提とした生活様式が浸透しつつあります。

令和3(2021)年度、光道園では、さらなる感染症拡大や自然災害によるリスクに備えるため、感染症発生を想定した事業継続計画(BCP)を策定、施設内感染を防ぐためのゾーニングを行うなど、予防対策の徹底と整備を進めました。経営面においては、特定社会福祉法人として、その役割を堅実に果たすべく、財務規律および内部統制の整備を図ることをはじめ、組織運営のガバナンス強化をより一層進めてまいります。法人本部での人事・労務・財務等の一元管理の他、各種規程を整備し、それらを実践するだけでなく、振り返りを行い、反省を活かしていくことで、より適切な施設経営に努めます。定期的な臨床心理士による利用者の方への聞き取りと職員へのフィードバックを支援に活かし、利用者の方の充実した生活と職員育成にも力を入れていきます。

「自立支援」「意思決定支援」の成果や結果が求められる中、これからも徹底した利用者本位を貫き、利用者の方お一人おひとりの「その人らしさ」や「可能性」に寄り添い、質の高いサービスを提供することで、利用者の方が望まれる生活・生きがいを支援すること、ご家族の方のニーズの変化や、制度・支援方法の多様化に対応する柔軟性を持つことを忘れず、利用者の方、ご家族の方、そして地域と共に、職員一丸となって、一步一步、未来に向かって歩みを進めてまいります。

令和3(2021)年度 基本方針

障がい者支援サービスの充実と将来構想

- (1) 光道園らしさを基調としたサービスの展開
 - ・盲重複障がい者の専門施設としての光道園
 - ・働く、学ぶ、育む光道園
- (2) 徹底した利用者本位の支援
 - ・自立支援実践を組み込んだ個別支援計画を基本としたサービスの展開
 - ・利用者個々の状況に合わせグループホームや老人施設への速やかな移行
 - ・光が丘ワークセンターの建て替え及びライトホープセンターの個室化の基本設計
 - ・ライトホープセンターの職員配置を2.5対1から2対1に加配
- (3) 障がい者スポーツ大会出場や園内障がい者スポーツの拡充

高齢者支援サービスの充実と将来構想

- (1) 介護保険施設、事業所の安定経営と高品質のサービス提供を目指す
 - ・介護ロボット、見守り装置・AI機器等の活用
- (2) 地域包括ケアシステムへの具体的対応
- (3) 養護(盲養護を含む)老人ホームの定員確保及び経営健全化
- (4) 自立支援型施設、事業所として確立を目指すとともに地域に拡大
- (5) 相談支援事業(ワンストップサービス)の充実

組織及び財政基盤の確立・強化

- (1) 法人及び施設経営へのガバナンス強化への取り組み
 - ・特定社会福祉法人に準ずる法人として、理事会の責任において、会計監査人の指導の下、財務規律及び内部統制整備を図る
 - ・電子決裁・デジタル化システムを導入し迅速な経営体制構築と業務省略化を図る
 - ・光道園SDGs宣言の実践
 - ・以上実施に当たり事務局の課・室廃止(財務、労務、人事、人材育成・確保、入所支援を一元的に)
- (2) 職員の研修・育成体制の強化
 - ・光道園ブランディング戦略(2020アニュアルレポート作成・広報活動強化)
 - ・臨床心理士による利用者聞き取りとフィードバックにより利用者満足と職員育成
 - ・メンタルヘルスチェック及びカウンセラーの定期相談の継続実施
- (3) 自然災害、原子力災害、感染症発生時の対応強化と事業継続計画及び平常時の防犯対策
- (4) 苦情解決体制及び虐待防止体制の機能強化
- (5) 計画的な大規模修繕の検討と実施
 - ・ライトホープセンター、ナースコール入れ替えとタブレット導入
 - ・介護ロボット、見守りロボット等各施設導入計画立案
- (6) 法人連携による地域貢献活動の具体的な取り組み

HIGHLIGHT

法人ハイライト

令和3(2021)年度に重点的に行ってきた
光道園の取り組みをご紹介します。

「持ち込まない」から一步踏み込んで 「感染しても広がらない」感染症予防策

新型コロナウイルス感染症への対応として、「持ち込まない」ための予防策を続けてきました。今年はさらに、自然災害や感染症拡大によるリスクに備え、適切な対応と事業継続のために、感染症発生を想定した事業継続計画(BCP=Business Continuity Plan)を策定しました。また、施設内感染を防ぐ目的で、利用者の方が過ごす空間をレッドゾーン(汚染区域)とクリーンゾーン(清潔区域)に分ける、ゾーニングを行い、「感染を広めない」対策も整備しました。



①ユニットごとのゾーニングとタブレットを活用した情報共有(第三光が丘ハウス)

1名の新型コロナウイルス感染症が確認された際、以下の対策を講じた結果、感染は拡大することなく、最小限の感染状況に抑えることができました。

■対策のポイント

- ・感染の疑いのある利用者の方は個室で対応
- ・コロナ陽性の方に接する職員を固定化して、職員を介した感染を防ぐ
- ・ゾーニングした空間ではフィルム越しでやり取りをする
- ・レッドゾーン内の職員との詳細な情報共有は、タブレットを用いることで情報量・機会を補う

②対策の見直しと徹底、ニーズに沿った受け入れにより、減収をV字回復

(デイサービスセンターさざんかホール)

デイサービスセンターさざんかホールでは5月の感染症発生により約2週間、営業が停止し、減収を余儀なくされました。しかし、以下の対策と事業継続のための攻めの取り組みにより、年間を通じては利用率が向上しました。営業再開に際し、ご利用者の方々からはたくさんの励ましの言葉をいただき、改めて多くの方々の支えを実感しています。

■対策のポイント

- ・営業再開時より、利用者の方にもマスク着用を徹底していただく
- ・パーティションの設置や座席位置を調整し、フィジカルディスタンスを確保する
- ・集団レクリエーションの方法を見直すと同時に、将棋など個別に楽しめる活動を増やす
- ・デイサービスの新規利用希望者を積極的に受け入れる
- ・ご本人、ご家族の要望や状態に合わせた活動や増回を積極的に行う

他施設でも徹底した対策により、感染症が発生した際にも法人内で感染症が広がることなく、クラスター感染は0件を維持できました。しかし、依然として福井県内の新型コロナウイルス感染症の感染者数は高止まりの傾向があるため、安心・安全な生活を「持続」していけるよう、引き続き対策を徹底していきます。

障がい部門の自立支援の取組みが「優秀賞」を受賞！

6月19日(土)、20日(日)に開催された第19回・第20回合同日本自立支援介護・パワーリハ学会(以下「本大会」)において、光道園で行っている自立支援介護が「優秀賞」を受賞しました。

本大会は、一般社団法人日本自立支援介護・パワーリハ学会が主催し、学会員が定めたテーマに沿って、自立支援介護についての研究成果や優秀な事例を発表する大会です。

光道園では障がい者支援施設利用者数全体の6割が60歳以上となり、「高齢化」が大きな課題となっています。今回は、平成29(2017)年より取組んできた高齢者ケアの基本にもなる「水分、活動性」の実践について、今年までの間、入院者数の減少という成果を中心に報告しました。受賞を励みに取組みを継続しながら、利用者の方の社会的自立を目指していきます。



次世代リーダーの学びを促進！能力開発研修 ～リーダーチャレンジコース～



令和2(2020)年度より、指導職の育成を目的とした「能力開発研修～リーダーチャレンジコース～」を行っています。今年度は、各施設の指導職17名を対象に研修を実施しました。

この研修は、外部講師と年間の通信課題のやり取りを通して学びを深め、福祉施設のリーダーとして必要とされる役割を理解し、事例をもとに職場で起こりえる様々な問題を柔軟に解決できる力を養うものです。受講した職員は、「リーダーとしての心構え」を学び、プレイングマネージャーとして率先して業務に取り組みながら、職員同士の“和気あいあい”とした雰囲気づくりに取り組んでいます。このような指導職の成長は、現場の意見交換や支援のアイデアの創造を活発にし、利用者の方の生活の質の向上にもつながります。また、後輩の育成・指導の心構えも学ぶため、新たに指導を任された場合にも自信をもって向き合うことができ、人材定着を担う職員としての成長もみられます。

住み続けられるまちづくりを 実現に向けて一歩ずつ

「光道園SDGs宣言」での取組み

光道園では、令和2(2020)年より「光道園SDGs宣言」を行い、「福祉の力にある無限の可能性を信じる」という思いのもと、11のSDGsゴールを掲げ、以下の6つのことを中心に取組んでいます。

福井県による官民連携の「ふくいSDGsパートナー」の立ち上げをきっかけに、SDGsに対して、光道園がどのように貢献し、地域にその専門性を還元できるかを考えました。そこで新たな取組みを実施していくのではなく、これまで取組み続けてきた地域の小学校を対象とした福祉体験教室や、地域の方と共に生涯を通じた健康づくりの一環として実施していた「ここから教室(こころとからだの教室)」等が、持続可能で住み続けられるまちづくりの実現につながっていることに気づきました。

これまで独自に行ってきた取組みをSDGsのゴールと紐づけることで、多くの方に光道園の取組みを知っていただき、新たな分野との連携や多くの方と手を取り合いながら進む道を見出していけたらと考え、今年度の取組みの成果を伝えていきます。

今年度は新たに、福井テレビにて「SDGsキャンペーン」のCMを放送しました。また、福井県のマイボトル運動の取組みに賛同し、マイボトル運動推進サポーターに登録するなど、連携の幅を広げています。

1

「光道園SDGs宣言」での6つの取組み

- ①福祉の芽(眼)を育てること
- ②一人ひとりの輝きを実現すること
- ③新たな可能性(ICT)を見出すこと
- ④地域をつなげていくこと
- ⑤パートナーと連携すること
- ⑥食品ロスをなくすこと



『絆の杜57号』では
「光道園SDGs宣言」を詳しく解説!



2

令和3(2021)年度の取組みの成果



[取組みの1] 誰もが暮らしやすくなるまちを、自分たちで考える体験に

以前から地域における公益的な取組みとして、福祉人材の育成を積極的に行ってきました。

大切にしていたのは、福祉を身近に感じて多角的に捉えてもらうこと、その先に将来の福祉の担い手を育てていくことです。「体験そのものがSDGs実践」をコンセプトに、光道園独自の福祉体験教室プログラムの中で「一人ひとりが互いの“障がい(壁)”を取り除く工夫を考えることで、住み続けられるまちづくりへ貢献し、誰ひとり取り残さず未来への社会を自分たちでつくりあげていくこと」を伝えています。

今年度は、地域の小学校のクラブ活動に計11回参加、7校の総合的な学習の時間に福祉体験教室を行うなど、

教育機関との連携を強化しました。

コロナ禍により訪問できない状況でも、オンラインツールを活用するなど、柔軟に連携しながら、子どもたちの福祉の芽(眼)を育てていきます。



[取組みの6] 残食ゼロへ

食品ロスへの取組みとして、栄養ケア・マネジメントを軸とし、①適切な食事量を把握する、②栄養バランスを取りつつ利用者の方の嗜好も踏まえた食事を提供することで、残食を減少させるほか、職員、利用者の方に向けて食育の機会を設けました。

光が丘ワークセンターでは、園内管理栄養士を講師に、利用者の方と職員とが食品ロスを考える研修を実施しました。普段から「残さず食べる」ことがSDGsにつながると気づけたことで、日々の食事に意識が向きました。より食事を美味しく楽しみにしていただけるようリクエストメニューを設けたことで、食事意欲も向上していました。

また、日中活動に散歩や運動を取り入れ運動量が増加したことで、食欲が増し、完食率向上にもつながっています。他にも、食事サービス委員会やカンファレンスの際に、利用者の方の声を受けた改善なども行い、食事面と運動面から完食率にアプローチすることで、昨年度と比較し年間で、残食を110kgも減少させることができました。



まだまだたくさんの方に取組んでいますので、『絆の杜60号』を併せてご覧ください



[施設・事業所紹介]

令和3（2021）年度の各施設・事業所の取組みを紹介していきます。

本ページの読み方

数字で見る では、施設・事業所の取組みを具体的にイメージできる数字を取り上げました。

トピックでは、今年度の取組みを「種をまく」「芽が出る」「花が咲く」の3段階で表しています。



「種をまく」では始めたばかりの取組み



「芽が出る」では継続的な取組みの経過



「花が咲く」では取組みの成果を紹介しています。

障害者支援施設 ライトワークセンター

施設入所支援・就労継続B型・生活介護・短期入所

ライトワークセンターは、様々な障がいによって生活全般の支援が必要な方が日中・夜間を通して生活を送る場です。その人らしく自立した日常生活、社会生活を送れるよう、身体介護に加え、就労の機会を提供し、さらに趣味活動や創作活動の機会づくりを行っています。生活支援では施設での健康な生活づくりと地域における積極的な社会参加に取組み、就労支援においては、一人ひとりの働く意欲や仕事のペースに寄り添った就労の機会提供に力を入れています。



数字で見る

想いは花模様へ「満開」の **135**個

陶華星（自主生産部門）では、新たに一輪挿し「満開」が商品に加われました。135個の小さな花模様と印は、利用者の方が丁寧に押つけてつけています。手に届いた方々に、一凛の光が差すようにと願いを込めて製作しています。



運動の継続による自信と誇り、
年齢を重ねても自分らしく

利用者の方の半数が65歳以上となる中、今後に向けた介護予防的支援が課題となります。そこで今年度は、体力を維持したまま、新しい作業にも臨めるよう、運動に力を入れました。朝散歩での園外歩行や、理学療法士とのタオル体操などにより体力維持・向上を図りました。健康への意識が高まり、新しい作業にも意欲的に取組めるなど、利用者の方の自信と誇りにつながりました。



新しい挑戦で、作業場に戻る活気

コロナ禍において委託作業を自粛していた中、今年度より新規作業として「アクリル板のフィルム剥がし」を受注できました。約2年ぶりの本格的な作業に利用者の方も働く喜びを感じ、意欲的に取組む姿が見られました。感染症対策は徹底しつつも、作業場には活気が戻ってきています。今後も安定した作業量を確保して、多くの方に参加していただける体制をつくっていきます。



障害者支援施設 光が丘ワークセンター

施設入所支援・生活介護・短期入所（空床利用）

光が丘ワークセンターは、様々な障がいのある方が生活されています。中道初代園長の想いを引き継ぎ、「働く光道園」という名の下に、生産活動を中心とした、健康で自立した生活を送るための生活、日中活動の支援を行い、「自分らしい生活」を実現していきます。支援の根底にある「利用者の方と共に」を大切に、共に取組み、共に作り上げていく場所として、「生活」と「活動」の場面を支えています。



数字で見る

減らした残食は **110kg**

管理栄養士から利用者の方に向けてSDGsと食についての研修を行う中で、食品ロスを共に考えました。また、利用者の方の声に応えた味付けやメニューの見直し、リクエストを取り入れることで、昨年に比べ、残食が約110kgも減らしました。



「そうなんだあ」という共感が、行動を変える

今年は「姿勢の改善」をテーマに、利用者の方同士で意見交換できる「ピアサポート」の時間を定期的に設けました。「ピアサポート」とは仲間同士の支え合いを意味し、ここでは「同じ悩みを持つ方同士で理解し共感を深め、己を意識する」ことを目指します。支援者から利用者の方への一方向だけではなく、同じ当事者であり共に暮らす仲間だからこそ、

響く言葉がある。良い姿勢を保つために意識したことや変化したことでの効果が仲間から聞けると、支援者からの一方的な提案ではなく、身近なアドバイスとして沁みしてくる。それが悩んでいた方の背中を押す言葉になることもあります。一人ひとりの声が響き合う関係を育む支援の在り方も暮らしの質を高めることになると考え、取り入れました。

就労支援事業所 フ・クレール

就労移行支援・就労継続支援B型

フ・クレールは、障がいのある方の「働く」を実現し「働いて成長する」を支援しています。また、就労支援を通して、働く利用者の方の満足度を高めることを目指しています。フランス語で「明るい」を意味する「clair:クレール」とお腹も心も満足感で「ふくれる」を組み合わせたものが名前の由来です。



数字で見る

味と心を届けて **30ヶ所**

創業から8年、店舗販売の他、保育園や企業等へ配達販売など納品先は3部門合わせて今年で30ヶ所になりました！1日に10ヶ所以上、配達や販売を行うこともあります。利用者の方と共に歩み、多くの一般企業・公共機関と取引が継続していますので、今後も地域に愛される施設であり続けます。



多くの方との出会いを求め、土曜日営業始めました

お客様より土日営業の要望を寄せていただいております。今年度より、新たに土曜日の営業を開始し、平日よりも長く営業時間を設定しました。その結果、前年に比べ集客率も向上するなど、フ・クレールの商品を多くの方に知ってもらえる機会になりました。皆様に愛されるフ・クレールとなれるよう、これからもお客様の声を大切にしていきます。



一般就労を見据えた支援では、スキルアップを自信に

委託部門では、一般就職を見据え、より実践的な作業を提供しています。例えば、工具などを使った作業や、電子部品の加工など、働く場面をより具体的にイメージできるものです。どの仕事も高い集中力や正確性が必要になるので、利用者の方のスキルアップにつながっています。フ・クレールでの経験が次のステップにつながるよう、利用者の方に必要なサポートをしていきます。

もえぎ館

もえぎ館は、障がいのある高齢の方が多く生活されています。高齢化に伴う生活機能や身体機能の低下により介護が必要な状態であっても、自分らしい生活の実現にむけた支援を実践しています。



数字で見る

思いに添った活動は **63** パターン

もえぎ館は20代から90代と幅広い年齢層の方が生活しています。その方に合った支援、自立支援ケアの考えを基に、障がい特性や年齢を考えながら、その方らしく楽しみのある生活を送れるよう63通りの活動を用意しています。



生活の中の楽しみが見つかる 班活動

利用者の方の生活に合わせた班活動を継続して行いました。利用者の方同士の関わりが増えることで、共に生きる仲間を思いやる気持ちが生まれ、絆も徐々に深まっています。さらに、職員と毎日リハビリをして体力を維持される方や、作業や学習の時間を主体的に楽しんでいる方もおられます。共同生活の中でも自分の時間を活気あるものにしようと、職員と話し合いながら見つめています。



主体的で楽しい自治会へ

自治会「青葉会」では、利用者の方同士の活発な自治が目指されています。総会で役員を決める際には、毎年、複数の立候補があるなど、主体的に運営されています。誕生会では、利用者の方が弾くアコーディオン演奏と共に歌って祝う場面も。毎週火曜日のお茶会には、利用者の方から参加を呼び掛けたり、活動を決めるにも多様な意見や質問が出たり、楽しい自治会にしたいという意志が見えました。

あさぎ館

あさぎ館は、年齢、障がい特性が幅広く、日常生活の様々な場面において、一人ひとりの力を引き出し伸ばすことを大切に、支援を行っています。「できなかったこと」を「できる」ようにするだけでなく、「できること」をさらに積み重ねて「本人のやりたいこと」につなげる。そのような取組みを様々な日常生活の場面で共に実践していきます。



数字で見る

年間の個別活動数は **499** 個

あさぎ館では担当の利用者の方と一対一でやりたいことに取組む「個別」という時間があります。入浴や運動といった全体の活動もある中で「個」を大切にしたい時間も提供できるのは、一人ひとりに向き合ってきたからこそです。



楽しみや喜びが形になる活動

日課である「個別」の時間は、創作活動や、野菜を育てるなど様々。この時間を通し、利用者の方はやりがいや意味を見出しています。例えば、創作活動としてビーズ通しを何年も続けておられる方は、限られた時間の中、ペースはゆっくりですが、着実に完成へと向かっていました。文化祭に出展するという目標に近づいていくことは「達成する喜び」につながっています。

また、同時に個々の「やりたい!」を集めて、グループでのクラブ活動も行っています。創作クラブでは利用者の方と職員が一緒になってアイデアを出し合い、作品を作ります。今年、全体で協力して作った大作「にこにこウェルカムボード」と「パズルボックス」は、ハートフル文化祭で展示され、新聞にも掲載されました。「個別」の時間でも、クラブ活動でも利用者の方の楽しみを形にしています。

ライトホープセンターは、様々な障がいのある方を対象とした施設です。一人ひとりの希望（ホープ）から始める取組み・支援・活動を大切にしています。

わかば館（通所生活介護）

利用者の方一人ひとりのすばらしい長所、可能性を引き出し、その人の「できること」をさらに磨きあげていける活動・支援を実践しています。また、ご家族のニーズや困りごとにも可能な範囲で対応しています。



数字で見る

互いを幸せにする 6つの誓い

利用者の方や関係者に質の高い支援を提供するため、職員として守るべき行動規範（クレド=誓い）を立てました。①コミュニケーションと笑顔②魔法のこぼれをつかう③お互いを認め合う④学びあい⑤行動する⑥できないことよりできることを探すの6つです。



通所部門「わかば館」がスタートしました！

通所部門が、新たに「わかば館」としてスタートしました。植物が「わかば」から「蕾」、そして「開花」していく様子から、利用者の方が次のステップに向けて成長できる居場所のひとつにする思いを込めました。活動や職員・利用者の方の関わり・学びあいを通じて、一人ひとりの「できること」に磨きをかける。そして「できないことでもできるように」共に努力を重ね、「わかば」から「蕾」に成長していけるようなサポートをしていきます。



相手の喜びを感じられるクッキングタイム

日中を楽しく、そして「できること」や「役割」を感じ自信につながるよう、利用者の方と一緒に料理をし、みんなで美味しく食べる活動を行いました。「作る」「作ったものを食べる」という「楽しみ」に加え、なじみの職員に「作ったものを食べてもらう」「相手に喜んでもらう」ことも大きな「楽しみ」になっていました。「できる」から「誰かの喜びにつながる」体験をこれからもたくさん作っていきます。

共同生活援助事業所 とらいと・みらいと

共同生活援助

とらいと・みらいとは、障がいのある方がサポートを受けながら、自分らしい生活を実現する場です。令和元（2019）年度に男女混合だったグループホームを男性棟、女性棟にしました（男性棟「とらいと」10床、女性棟「みらいと」10床）。

アットホームな環境の中、日常生活のサポートに加え、精神的な支えとなるためのコミュニケーションを取りながら、一人ひとりの自立への思いを育てていくことを大切にしています。



互いの価値を認め合える生活の場をつくる

利用者の方・職員・世話人の3者での話し合いを定期的に設定することで、快適に生活するための工夫を検討していきました。一人ひとりの理解を得て進められるように個別に丁寧に説明を行うなど、共通理解を大切に、より良好な人間関係の構築を図りました。さらに一人ひとりの意見を尊重しながら、お互いの価値観も共存できる場を育てていきます。



共に生活する仲間を理解し、助け合える関係性へ

一部の利用者の方が中心となって立ち上げた自治会を通して、定期的に話し合いや食事が開かれています。自治会への参加は自由で、個人の価値観や生活スタイルにも重きが置かれています。そのような中、集団の中で互いの障がいを理解し、助け合えたことで絆を深められました。花火大会やお祭りなど、楽しみにつながる企画もどんどん生まれてきています。

数字で見る

自治会発足から 3年

何をしていいのかわからない、何が出来るのかわからないを手探りで進んできた発足時から3年、一人ひとりの意見や考えを出し合える場になってきました。共同生活の中、自治会を通して、利用者の方同士の絆も深まるサポートをしていきます。

きらら館

きらら館は、日中活動を通して働く喜び、学ぶ楽しさを利用者の方と共に感じ育むことで、「その人らしい生活」のための支援に取り組んでいます。近年では、盲重複障がい以外の利用ニーズも多く、一人ひとりに寄り添う支援を行っています。



数字で見る

新たに成人を迎えた **1**名

1月13日に1名の方が成人を迎え、利用者の方、職員でお祝いをしました。ご本人はピシッとスーツを着て出席。当日はご家族の協力のもと、職員お手製の20年を振り返る動画や、ご家族からのお手紙、ご本人からは成人の誓いがあり、感動的な式となりました。



体験を通して学ぶ自治会活動

2年前から発足した自治会活動は、「利用者の、利用者による、利用者のための活動」になってきています。今年はミニトマトを植え、収穫し、食べる菜園活動から、育てること・食べることのありがたみを実感しました。また、イチゴは残念ながら実りませんでした。また、上手くいかない経験からは「挑戦なしに成功も失敗もない」という学びを得られました。



感染予防を徹底して、屋外活動の機会を増やす

今年度は屋外での活動も感染予防策をとった上で、工夫しながら行いました。「外に出る＝新型コロナウイルスに感染」ではなく、フィジカルディスタンスを意識した上で「マスクと手指消毒」を徹底しています。その上で行った屋外活動は、利用者の方に季節を感じてもらえる機会になりました。地域のスポットへ出かけていくことも増やしていき、活動的な生活を支援していきます。

さくら館

さくら館は、視覚と聴覚の重複障がいである「盲ろう」者の方も多く生活をしており、全国でも数少ない専門施設です。これからも教育機関など外部の専門家とも連携をしながら、盲重複障がいの専門性をさらに向上させ、利用者の方の生活を支えていきます。



数字で見る

外出気分でお買い物会開催 **2**回

コロナ禍でも楽しく過ごす工夫をと、地元企業の協力のもと「出張お買い物会」を開催しました。食料品、衣料品や雑貨など商品は100種類以上!商品を選びすぐって並ぶレジ前に笑顔があふれました。現状を見据えつつ、生活に楽しみを取り入れられるような企画をしていきます。



誕生! 地域に咲き誇る チューピーちゃん

今年も製作活動での作品を文化祭などで多くの人に見ていただきました。中でも一つひとつ手縫いで仕上げる「チューリップ」は大好評!販売もしている「チューリップ」は、250本以上が地域の皆さんの手に渡りました。その「チューリップ」から新たにマスコットキャラクター「チューピーちゃん」が誕生しました。さくら館の名物キャラクターとして皆さんに愛されますように。



白熱!! 自治会総選挙

今年度の自治会活動として、新たに「自治会総選挙」を開催しました。選挙ムード一色になる中、立候補者は楽しみながら演説や握手会などの選挙活動を行いました。選挙当日、7名の立候補者はソワソワした様子でしたが、音楽が流れるおやつタイムに楽しく投票が行われました。開票結果は後日、館内放送で利用者の方にお伝えさせていただきます。

ライフトレーニングセンターは、主に視覚障がいと、その他の障がいを併せる盲重複障がいの方を対象とした施設です。また、地域ニーズに対応した日中一時、短期入所など、在宅生活を支える社会資源としての役割を担っています。

たねのいえ (通所生活介護)

たねのいえは、障がいのある方が、地域で安定した生活を営めるよう日中活動を中心とした支援を行うデイサービスセンターです。支援員に加え、看護師、理学療法士が常駐し、一人ひとりの状態に合わせたケア、リハビリテーションを提供しています。「たねのいえ」という名前には、障がいのある方の可能性の種が芽吹くようにという想いが込められています。



オンラインでも顔が見える支援を

モニタリング等の外部の方との話し合いの場を、今年度初めてzoomを用いて実施しました。コロナ禍の中、画面越しであってもリアルタイムで顔を合わせられ、利用者の方も同席できて、直接意見を伺えました。

また、成人式では、zoomを介し来賓の方に直接祝辞をいただいたり、式典をご覧いただけたりしました。録画映像をご家族にお渡しでき、節目を喜ばれていました。



共に作って味わう、たねのいえcooking

開設当初より日中活動として、月に1回、2日間に渡る「cooking」を行っています。支援員が季節のおやつや利用者の方が好きなものなどからメニューを決め、調理後はできたてを食べていただきます。メニューによっては前日から準備するなど趣向を凝らしています。一人ひとりに触れて体験してもらうことを大切に、食材を砕く、切るなど、できることに合わせて支援員と共に調理しました。

数字で見る

1週間の送迎移動距離は 約 **566km**

平日5日間の営業日には、ほとんどの利用者の方を送迎しています。コロナ禍前から、訪問時、利用者の方はもちろんご家族の体調もみて、移乗など必要なサポートをしています。車中でも様子に気を配り、時には専門職とも相談をして、安全安心に事業所との行き来をしています。

こども支援センターえがお

児童発達支援センターわくわく・保育所等訪問支援事業すくすく・放課後等デイサービスにこここ

児童発達支援・保育所等訪問支援・放課後等デイサービス・短期入所

こども支援センターえがおは、発達に気付きのある未就学児や学童児、またはその保護者等の、療育や子育て相談に対応する療育機関です。児童発達支援センターわくわく、保育所等訪問支援事業すくすく、放課後等デイサービスにこここ、短期入所の4つの事業を行っています。子どもたちの自己肯定感や自尊心を育み、保護者の方の子育ての悩みに寄り添いながら、みんながえがおで生活できるサポートをしていきます。



医療的ケア児の受け入れをはじめました！

以前より医療的ケアが必要なお子さん(医療的ケア児)の利用意向を受けていたことから、受け入れ態勢の整備を進めていました。今年、園内看護師を中心とした研修の実施や他事業所等に見学・実習に行き学びを深め、ついに医療的ケア児を受け入れることができました。最初は戸惑いや緊張もありましたが、主治医や保育所等の看護師と連携し、無事、就学先へとつなげることができました。



夢が実現した就労移行支援

「パンを作る仕事がしたい」という小学生の頃からの夢を実現するため、「にこここ」では手指を使った活動や困った時にも自分から相談できるようなコミュニケーション力を養ってきました。本人の努力が実り、この春からフ・クレールでパン作りの仕事に就くことに。夢を実現し、新たな一歩を踏み出しています！これからも一人ひとりの夢に向き合い、実現のために共に歩みます。

数字で見る

新たな「それぞれの」 **1**

開所から3年、療育の基礎ができつつある中、わくわく、にこここ共に新たな一歩を踏み出しました。児童発達支援センターわくわくでは、医療的ケア児の受け入れを開始。さらに、放課後等デイサービスにこここでは、利用児がフ・クレールでの就労となり、えがおから光道園の就労施設に始めてつながりました。

相談支援センター こうどうえん

計画相談支援・障害児相談支援・地域移行支援・地域定着支援・委託相談支援
鯖江市地域生活支援拠点センター「リノ」

相談支援センターこうどうえんは、鯖江市からの委託を受け障害者相談支援と重度化・高齢化・親なき後に関する相談窓口として地域生活支援拠点事業のコーディネーターを担っています。生活上の相談に応じ、その人らしい生活を共に考えています。また、計画相談では障害福祉サービスや児童通所支援等を利用される方がスムーズにご利用になれるようサービス等利用計画を立てる支援をしています。障がいのある方のみならず、子どもから高齢者までワンストップの相談窓口です。



数字で見る

年間モニタリングは **213**件
170件(標準)から

相談対応では、要保護児童対象、虐待、8050問題等を抱える家庭も少なくなく、相談者の状況に合わせ各関係機関との連携を重視しました。また訪問などで思いや希望を再確認し、より良い生活につなげるため、モニタリング期間等を変更したことで相談者の安心安定につながりました。



ICT環境を整え、 丁寧な相談対応へ

感染状況が高止まりする中、今後の生活や自宅訪問・会議の開催に不安を感じる方が多い年でした。そのため、相談者の安心安定を考え、ICT機器の導入を積極的に行い、zoomなどのオンラインでの相談体制を整えました。その中で得たノウハウにより、丁寧な相談対応が可能となり、相談者の状況に合わせて計画の見直し、モニタリングの追加に適宜対応できました。



オンラインでつなく、 地域のつながり

鯖江市地域生活支援拠点事業の一環で「親なき後を考えるオンライン座談会」を開催しました。成年後見制度をテーマに、11名の方に参加いただきました。制度の理解や当事者家族同士での情報交換もでき、「先の不安が解消され嬉しかった」「みなさん同じような不安があるのだと共感した」などの感想も寄せられました。今後も地域の集いの場・情報発信の場を目指していきます。

越前町相談支援センター さざんか

基幹相談支援・障害者相談支援・指定特定相談支援・
指定障害児相談支援・地域移行支援・地域定着支援

越前町相談支援センターさざんかは、越前町から基幹相談と障害者相談支援を委託されている相談支援事業所です。委託の相談では越前町にお住まいの方々の気がりさや障がいに関する相談を広く受け付けています。また、計画相談では障害福祉サービスや児童通所支援等を利用される方がスムーズにご利用になれるようサービス等利用計画を立てる支援をしています。その他、住み慣れた地域、在宅での生活を継続するための支援なども行うなど、子どもから大人までワンストップに相談できる窓口であり続けます。



数字で見る

モニタリング数は **387**件

国の方針で、令和2年から3年にかけてモニタリング実施回数は1.3倍の年2回に増えました。さざんかでは、障害者支援施設のサービス等利用計画の担当と兼務する相談支援専門員が3名おり、施設の業務との調整を図り、増加にも対応できる体制を維持できました。



「この地で働きたい」を叶える法人へ

光道園では、県外出身の利用者の方も多く、盲重複障害の専門的な支援が充実した中で重度の方の受け入れも積極的に進めてきました。青年期から高齢期にかけての専門性に加え、近年では、幼少期からのサポートのニーズへ応えるべく、障がい児の相談や支援を充実させてきました。丹南地区で生まれ育つ児童が自分の可能性に気づき、「住み慣れた地域で働き、暮らし続けたい」という希

望を叶えられるような在り方やサービス利用を模索し、希望に添った児童のサービス等利用計画も立ててきました。そして今年は、相談支援専門員や相談支援センターえがお、そしてフ・クレールとの連携が実を結び「光道園を利用」から、「光道園での就労」につながりました。地域に根ざす法人として、これからも児童・青年期のサポートも充実させていきます。



…種をまく



…芽が出る



…花が咲く

養護老人ホーム 第一光が丘ハウス

一般型特定施設入居者生活介護

第一光が丘ハウスは、65歳以上で、ご家族や住居状況の理由により在宅生活の継続が困難な方を対象とした施設です。入所の可否は市町村の判断で決まります。平成22(2010)年に改築され、全室個室に生まれ変わりました。その人らしいライフスタイルを実現できるよう、多職種が連携し、創意工夫ある支援を行っています。



数字で見る

コロナ禍でも
買い物のチャンス **60**回

水曜日はお店の方に商品をもって来てもらい、現物を見て買い物ができました。木曜日は移動スーパーが注文品を届けてくれます。衣類は移動ブティックを活用。「食べたい」「オシャレがしたい」の声に寄り添いました。



利用者参加のシミュレーションで意識を高める

感染防止のため昨年度よりゾーニングし、居室対応にする等、発生時を想定したシミュレーションを重ねてきました。7月には必要物品を点検し、状況ごとの対応をマニュアルにまとめました。その上で、シミュレーションを3回実施し、職員も声を掛け合いながら、支援と行動を精査しました。利用者の方には共同の生活空間でのマスク着用をお願いし、危機管理意識を持続できています。



口腔ケアが毎日気持ちよく元気に過ごす秘訣

自立度の高い方は「歯磨きは自分で」と、言われることが多かったのですが、誤嚥性肺炎で入院された方に何うと、十分に磨けていない事実が明らかになりました。そのため、歯科衛生士の指導で改善を図ると、入院はなくなり、それを知った方達から歯や口腔内の相談が増え、歯科通院につなげたケースもありました。毎日の歯磨きで健康に過ごせるよう口腔ケアで支えています。

養護(盲)老人ホーム 第二光が丘ハウス

一般型特定施設入居者生活介護

第二光が丘ハウスは、65歳以上で、ご家族や住居状況の理由により在宅生活の継続が困難な方を対象とした施設です。入所の可否は市町村の判断で決まります。平成22(2010)年に改築され、全室個室に生まれ変わりました。視覚障がいのある方が自立した生活を送れるよう、障がいに配慮した環境が整えられています。歩行訓練士や各専門職が連携し創意工夫のある支援をします。



数字で見る

今年度も職員と
楽しんで歩いて、 **2,820**km

利用者の方全員での歩行距離は、2,820kmで、20kmほど昨年度より延びました。職員と話し楽しみながら歩くことで自ずと距離は延び、職員も利用者の方の好きなことや、思いを伺える大切な時間になっています。



「できる」をつくる個別支援

高齢になり目が不自由になった方も少なく、「何もできなくなった、職員に迷惑をかけたくない」と、居室に閉じこもりがちになることもあります。しかし心の奥底には「ひとりで〇〇ができるように」「自分の力で〇〇に行きたい」等の想いがあります。

それに応える個別支援の例として、「一人で散髪室に行けるようになりたい」という希望に添えるよう、歩行訓練士に支援方法や助言を受け、職員が歩行支

援を行いました。最終的に利用者の方は一人で散髪室へ行けるようになりました。

また、昨年度新たに設けたアクションルームでは、カラオケや本読み等の行事や「つるかめ体操」を毎週行うなど、居室外での楽しみを創出しています。今後、個別支援と職員研修を充実させながら専門性を高めていくことで、視覚障がいの方が自立し、望む暮らしを実現するために支援をしていきます。

特別養護老人ホーム 第三光が丘ハウス

ユニット型介護老人福祉施設・短期入所生活介護

第三光が丘ハウスは、認知症などの常時介護が必要な方のための入所または短期利用ができる施設です。「地域社会の中で自分らしく暮らしたい」という利用者の方の想いに寄り添い、畑や自宅への外出など、地域とのつながりを実感できる生活、「もう一つの居場所」としての環境づくりに取り組んでいます。

さらに、明るく家庭的な雰囲気のユニットケア、利用者の方の自立を支援する質の高い支援の提供に向け、職員一人ひとりが学びと経験をしながら、専門性の向上に努めています。



地域から選ばれる施設、介護の質の向上を目指して

今年度は、望む生活の実現に向け、個々の専門性の向上を重点的に行いました。実践におけるOJTと専門職による計画的な研修によって、全ての職員が学び、刺激し合いながら介護の質の向上のため努力する姿がありました。特に、外部の認定看護師を招いた研修では、年3回に分けて感染施設ラウンド、皮膚・排泄ケア、看取りケアについて学びました。この研修は、普段からの疑問や不安など現場の声に添う形

で実現し、受講後は即時に学びが活かされています。

また、毎月のリーダー会内で定期的に計画して、全体や内部研修も実施しました。業務に必要な知識やスキルを各自で学ぶに留まらず、受講した職員から内容を伝達する仕組みにしたことで、ユニット全体で学びを共有できました。技能実習生は日本語の理解力による差も考え、伝わるような言葉や速度で伝えています。

数字で見る

福祉の未来を担う実習生 **13名**

コロナ禍で受入制限もある中、外国人技能実習生4名、介護職員初任者研修2名、介護実習過程3名、ソーシャルワーク実習過程4名の方を積極的に受入れました。職員も実習生の姿勢に刺激を受け、現場で培った専門性を伝えていました。

デイサービスセンター さざんかホール

通所介護

デイサービスセンターさざんかホールは、水分・食事・排泄・運動の側面から課題を捉え、支援することで、在宅生活の継続を支えています。3ヶ月に1度の訪問では、小さな変化や困難さに気づき、ご本人、ご家族の意向も踏まえた支援を展開しています。

理学療法士、言語聴覚士、歯科衛生士、管理栄養士などの専門職とも連携を密に、根拠に基づくことで、できることを見極め、ご自身の力を充分に発揮できる環境を整えた自立支援介護を進めています。



科学的根拠に基づいたケアにつながる「LIFE」導入

令和3(2020)年度の介護報酬改定に伴い科学的介護情報システム(LIFE)へのデータ提出とフィードバック情報の活用により、介護サービスの質の評価と科学的介護の取組みを推進してきました。言葉では非常に難しく感じられますが、利用者の方一人ひとりに合わせた支援を展開するための、根拠となるデータを収集するための指標が明確になる取組みです。

「もう一度挑戦してみたい」や、「こんな自分になりたい」等の想いを安全で、精度が高く実現できるよう職員が一丸となり仕組みを浸透させ、活用したデータを支援につなげています。今後も科学的根拠に基づいたデイサービスを目指し、地域に根差した事業所として邁進していきます。

数字で見る

転倒による骨折の入院が減少 **2件**

自立支援介護における基本ケアを継続的に展開したことで、昨年度は6件あった転倒由来の骨折による入院件数を2件に大幅に減少できました。在宅生活を基軸に、それぞれの方の「その人らしさ」を見つめ、支援することを基本理念に笑顔で営業しています。

ヘルパーステーション さざんか

訪問介護支援

ヘルパーステーションさざんかは、訪問介護員(ヘルパー)が利用者の方のご自宅を訪問し、入浴・排泄・食事等の身体介護に加え、調理・洗濯・掃除等の家事援助、さらには生活等に関する相談・助言等の日常生活に必要な援助を行います。ご自宅で自立した生活を営めるよう安全・安心・適切な訪問介護サービスを自立支援・重度化防止の視点に立ちながら、365日切れ目なく行っています。



数字で見る

訪問で鳴らした
チャイムは **3553**個

コロナ禍による感染症対策を十分にとり、現在では訪問前の体調や、ご家族も含め県外の方との接触の有無等を確認し、必要に応じて防護服を着用し訪問する形も定着してきました。利用者の方が満足していただけるよう、ヘルパーの役割を果たしていきます。



スピード調理でも「おいしい!健康!食べやすい!」を提供

ヘルパーは、決められた訪問時間の中で、ご自宅にある材料で、栄養面でも食べ易さでも、利用者の方の体に合わせたメニューを考えています。毎年、登録ヘルパーの希望に添い、園内管理栄養士による調理実習を行っています。今年は「短時間でできるスピード調理」をテーマに、管理栄養士のアドバイスを受けながら電子レンジを利用

したメニューを調理しました。試食では参加したヘルパーより「美味しく食べやすい!これなら簡単、家でまず作ってみます」という声も。その後、訪問のご家庭で材料をアレンジして、調理ができました。「料理をつくる」のではなく、その方の「体をつくる」食事を今後も提供していきます。

居宅介護支援事業所 さざんかホール

居宅介護支援

居宅介護支援事業所さざんかホールは、介護が必要な状態になっても、住み慣れた場所で、その人らしい自立した生活が送れるように、ご本人の希望を盛り込んだケアプランを作成し、サービス事業所や医療機関等と連携しながら調整しています。一人ひとりの「望む暮らし」の実現を私たちがお手伝いさせていただきます。



数字で見る

リモートでの会議は **8**件

昨年は2件だったリモート会議は、ツールに慣れ、ノウハウも蓄えられたことで8件に増えました。面会が難しいこともあるコロナ禍で、電話だけでは把握しにくい情報も画面などから正確に掴みスムーズな連携になっています。今後も電話や対面に加えた一つの選択肢として活用していきます。



一人ひとりのご利用者をケアマネ全体で支える

現在、158名のケアマネジメント(令和4年1月現在)を担当しています。一人ひとりに担当ケアマネジャーが就き、ご本人やご家族の相談に乗り、対応・サービス調整を行っています。

今年度より、初回の訪問や必要時にケアマネジャーは2名で訪問するようにしています。これは複数で関わり、色々な視点で課題をとらえることで、良い支援につなげたいという思いからです。

職員も互いの支援の方法を直接見ることで学び合い、知識や技術の質的向上につながっています。また、日頃より、互いの担当利用者の方の状況を共有し合うことで、担当者が不在の時にも可能な限りフォローしあえる体制になりました。一人ひとりをケアマネジャー全体で支え、一人でも多くの方の安心につながるように努めていきます。

在宅介護支援センターさざんかホールは、越前町の委託を受け、地域の高齢者の安心できる暮らしのため、お宅を訪問し一人ひとりの心身の状態を把握(実態把握)しながら、介護予防を推進し、日々の生活に対する相談(総合相談)に応じています。地域の機関と連携を取り、身近な相談窓口として、これからも地域のニーズに応え続けていきます。



数字で見る

初めてのお宅訪問は **98件**

コロナ禍で訪問での実態把握が難しい期間がありました。今年度は一昨年より30件多い実態把握ができました。初めての訪問から新たに生まれたつながりを大切に、それぞれの方の地域支援を進めていきます。



心も体も元気に！「つるかめ教室&にこにこ教室」

今年度は、在宅介護支援センターが担う予防教室の年間予定76回の内、つるかめ教室25回、にこにこ教室24回、計49回をコロナ禍の中、開催できました。教室では、健康チェックに気を配り、体操で体を動かすことはもちろん、こんな時期だからこそ教室に参加した地域の方々が集い、笑いあえる場となる環境づくりに努めました。その中で、参加者同

士での境遇を理解し合い、手を取り合っ手芸活動に打ち込む姿も見られました。また、感染予防として自ら使用したマットの消毒等を行ってくださり、共に安心安全を守るという地域の方々の心強さも感じています。今後も地域の皆様の健康的な生活に向けて、このような予防教室が広がり、気軽に訪れていただけるよう取組んでいきます。

リハビリ課

リハビリ課は、総勢14名の専門職で全事業所のリハビリテーションを担当しています。「小さな言葉にも耳を傾け、専門的視点からの気づきを大切に、利用者の方と共に学び続けること」「障がいの有無、程度に限らず個々の可能性を信じ、向き合い続けること」この二つの理念の下、利用者の方一人ひとりの思いを尊重し、日々のリハビリテーションや、法人内の研修を行っています。



全職員の介護実践力を養う 介護技術研修プログラム

平成24(2012)年度から始まった全職員対象の介護技術研修がリニューアルしました。利用者の方の自立を促す介護実践力を身につけることを目指して、今年度は、課程を大幅再編。基礎・中級に加え、上級を新設して実施しています。上級課程では、日々の支援での疑問等を「食事」「排泄」「入浴」「移動・移乗」の4大介護のフローチャートで可視化し、中級までの学びを紐づけながら学ぶプログラムに。上級課程修了の職員が18名誕生しました。



データ管理でヒヤリハット・ 事故を法人全体の取組みへ

これまでヒヤリハットや事故報告の共有は、各施設内で完結しており、リハビリや栄養等の専門的な視点で捉えるケースは稀でした。今年度から、電子申請・決済ツールを活用したデータ管理となり、施設事故予防委員会と連携することで、法人全体で把握し取組むことが可能になりました。事案について、各施設と共に様々な角度から分析・検証を行うことで、専門職の視点を支援員にも伝えることができている。これからは事故の予防を図り、安全なくらしにつながっていきます。

数字で見る

ヒヤリハットの
内容把握率は **100%**

今年度から電子申請・決済ツール(WaWaFlow)を活用したことで、支援員のみならず、専門職の視点からもヒヤリハットや事故報告書に意見を反映できるようになりました。そのため、リハビリ課での内容を100%把握し、対策や検証などを共に確認しています。

事務局 (法人本部・総務グループ・企画グループ)

事務局は、法人本部(財務・労務・人事等)、総務グループ(財務・労務補助、受付、防災等)、企画グループ(障がい部門の入所調整、広報、人材育成研修等)から成り立っています。そして、各事業所、施設、事業課を横断的に支援する役割を担っています。



くらしやすさをつくる ICTによる環境整備

鯖江事業所のwi-fi環境の整備に伴い、PHSからスマートフォンへ移行しました。これにより、見守り介護ロボットaams(アムス)と連動し、利用者の方の睡眠状態を確認できるようになりました。また、居室からの発信にとどまっていた通信網も、職員側から利用者の方へ連絡が可能になり、業務負担の軽減、支援の質の向上につながっています。さらに朝日事業所では、立替予定施設を除く、障害者支援施設のwi-fi環境が整い、さらなる業務効率化を目指しています。



光道園インスタグラムで伝える 日常の輝き

光道園の“今”を伝える媒体として、新たに公式インスタグラムを開設しました。毎週、定期的に各施設の様子や商品紹介などを発信し、今年度は202件投稿して、約300名の方にフォローしていただきました。投稿から「福祉の仕事、楽しそう」「光道園は陶芸やパンを販売しているんだ」など、初めて知っていただく機会にもなっています。日常の中には利用者の方の笑顔や、職員の仕事への誇りがあります。今後の魅力発信に乞うご期待!

数字で見る

学校訪問回数 **28回**

チラシ郵送という従来の方法から、今年度は各学校の担当との顔の見える関係づくりのため、直接訪問し、見学会の案内や学生に向けたメッセージをお伝えしました。その結果、学生についていただく機会が増え、就職イベントの参加が増えました。

事務局 (栄養グループ)

管理栄養士・栄養士一人ひとりが担当施設を受け持ち、利用者の方が健康で自立した生活を営めるように嗜好と食事内容を尊重した栄養ケアを展開しています。利用者の方に寄り添い、食べたいメニューを伺い、食事会等を通じて心と胃袋が満たされる食事の企画・立案を行っています。いつまでもお元気でいてほしい、そんな願いと想いを一緒に食べていただく食事づくりが私たちの使命であると感じています。



「食べたい」に応える 食事であり続ける

安全な食事を提供するため、定期的に、グミ等を用いて入れ歯の状態や飲み込む力を把握し、食べ方をリハビリ課職員と共に検討しています。「白いご飯が食べたい」と悩むことを強く意識したり、口腔リハビリに意欲的になったりする利用者の方も、厨房で「食事を作る」から、その方の傍らで「口から食べる身体をつくる」ことも栄養部門の使命と考えます。いつまでも安全で美味しく栄養を摂れる食事となるよう食の提案と評価を繰り返して実施していきます。



食育による学びが 「食品ロス」を減らす

栄養士全体で食育に取り組みました。ライトホープセンターでは、令和12(2030)年までに、残食を1日平均9.3kgから半分まで減らすことを目標に、食育を実施。残食の多くは食物繊維を多く含むもので、食べるきっかけになるよう食物繊維の効果も紹介しました。利用者の方は質問が飛び交うほど熱心に耳を傾けていました。また、残食を目で見ても献立作成に活かし、多職種で声を掛け合ってきたことで、1年で月平均1.3kgも減らすことに成功しました!

数字で見る

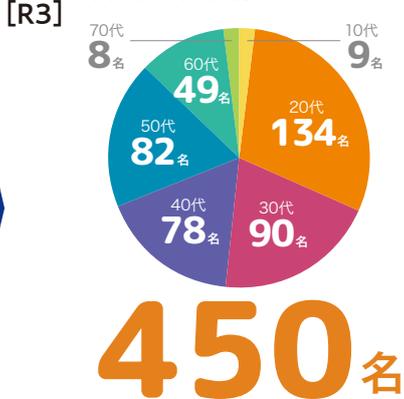
郷土を料理で訪問 **132回**

県外からの利用者の方も多いため、料理で郷土を懐かしみ、楽しんでいただこうと平成23(2011)年度より、月に1回郷土料理・ご当地グルメを提供してきました。その数今年で、132の都道府県を巡ったことに。故郷の料理が出ると、思い出話に花が咲きます。

「10」の数字で見る

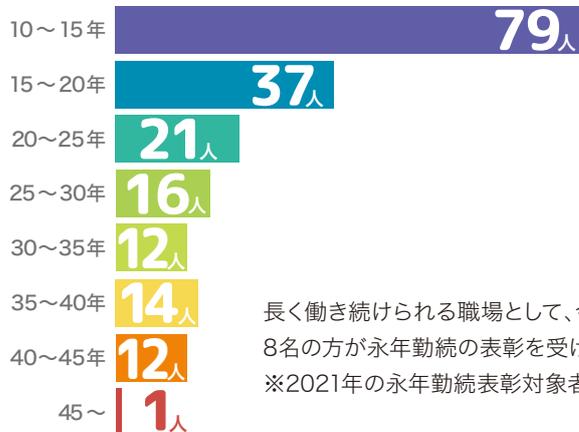
働く 光道園

職員の年齢構成と在籍数



幅広い年代の職員が働いており、ライフステージが変わっても働きやすい環境が整っています。

職員の勤続年数



長く働き続けられる職場として、今年度は8名の方が永年勤続の表彰を受けています。
※2021年の永年勤続表彰対象者は8名

学ぶ 光道園

資格取得者数

(令和3年度の資格の新規取得者数)



今年度は29名の職員が国家資格に合格しました。

職員の持つ福祉系資格

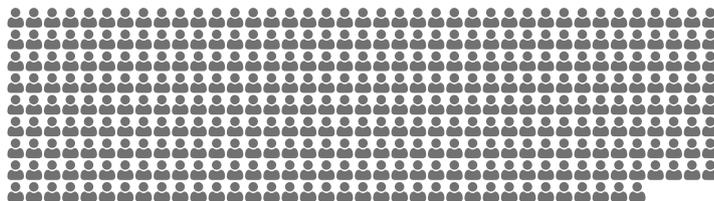
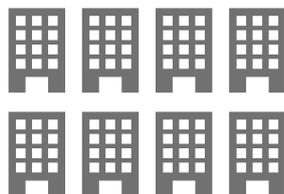
15種類

- 1 介護福祉士
- 2 社会福祉士
- 3 精神保健福祉士
- 4 社会福祉主事
- 5 保育士
- 6 看護師
- 7 歯科衛生士
- 8 理学療法士
- 9 作業療法士
- 10 言語聴覚士
- 11 鍼灸師
- 12 管理栄養士・栄養士
- 13 歩行訓練士
- 14 公認心理師
- 15 介護支援専門員

利用者の方の質の高い生活を創造するため、福祉専門職同士が連携した支援を行っています。

育む 光道園

学びを開く福祉体験教室の開催



8団体 347名

(オンライン授業含む)

コロナ禍においても、滞りなく福祉体験教室が継続できるように、対面やオンライン等で柔軟に対応しました。

貸借対照表

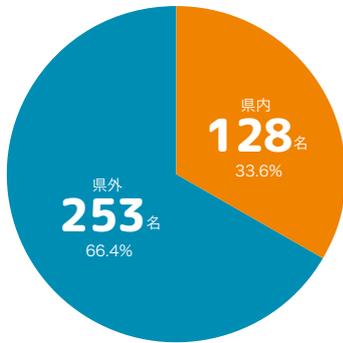
流動資産	1,342,260
固定資産	5,311,812
資産合計	6,654,072
流動負債	341,789
固定負債	153,509
純資産の部	6,158,774
負債及び純資産合計	6,654,072

事業活動計算書

【サービス活動増減の部】	
サービス活動収益計(1)	3,028,912
(運営収益)	2,992,852
(就労支援収益)	23,530
(寄附金収益)	12,130
(養成研修収益)	400
(その他収益)	0
サービス活動費用計(2)	2,981,369
(人件費)	2,063,610
(事務費・事業費)	725,751
(就労支援事業費用)	27,617
(減価償却費)	234,949
(その他費用)	△ 70,557
サービス活動増減差額(3) = (1) - (2)	47,543
【サービス活動外増減の部】	
サービス活動外収益計(4)	26,691
サービス活動外費用計(5)	17,049
サービス活動外増減差額(6) = (4) - (5)	9,642
経常増減差額(7) = (3) + (6)	57,185
【特別増減の部】	
特別収益計(8)	9,588
特別費用計(9)	9,148
特別増減差額(10) = (8) - (9)	440
当期活動増減差額(11) = (7) + (10)	57,625
【繰越活動増減差額の部】	
前期繰越活動増減差額(12)	3,053,250
当期末繰越活動増減差額(13) = (11) + (12)	3,110,875
基本金取崩額(14)	0
その他の積立金取崩額(15)	70,433
その他の積立金積立額(16)	227,900
次期繰越活動増減差額(17) = (13) + (14) + (15) - (16)	2,953,408

(単位：千円)

障がい部門の利用者の方の出身地割合



令和4年3月31日現在、40の都道府県の方が光道園をご利用になっています。

学ぶ機会が多様にかかれる研修

[内部]

320回

[外部]

351回

52回
(法人共通研修)

うち 42回
(対面研修)

オンラインでの研修が増え、施設・事業所にいながら参加できるようになり、外部研修への参加回数が増えました。内部研修も充実しており、キャリアアップにつなげ、質の高いサービスを提供しています。

各種委託事業の成果

[白杖歩行訓練]

人数 13人 延べ回数 34回

[福井県盲ろう者向け通訳
介助員派遣事業]

延べ回数 57回

福井県の委託事業を通して、地域ニーズへの対応を行いました。

生活困難者総合相談・生活支援事業
(ふく福くらしサポート事業)の成果

対応件数 2件

地域における公益的な責務として、生活困難者への経済的支援(食料や衣料品の現物支給)を行いました。今後も関係機関と連携し、自立した生活に向けた継続的なサポートをしていきます。

ご寄贈いただいた団体数

[マスク、フェイスガード等]

3団体

[タオル、石鹸、メッセージカード等]

11団体

昨年度に引き続き、各ボランティア団体の皆様から様々な寄贈品をいただきました。コロナ禍においても、地域の皆様とのつながりを大切にまいります。



光道園's origin

「育む光道
～人と

手さぐりで始まった施設運営は「育む」環境の原点に

昭和41（1966）年4月、光道園は日本初の、また世界でも類例を見ない盲重複障がい者の自立を支援する施設「ライトセンター」（現ライトワークセンター・ライトホープセンター）を開設しました。

当時の福祉行政において「盲重複障がい」という言葉は皆無に等しく、施策はおろか存在すら把握されていなかった中で、中道益平初代園長（以下、中道園長）と当時の職員の試行錯誤によって施設運営が形作られていきました。開設してからの毎日は、中道園長の元に助言を求める職員がやって来て、週に何回も職員会議が開かれ、全ての職員が連携・協働して支援を行っていました。

問題・課題を職員間で共有し、解決の方法を幾通りも考えだして実践していく。利用者の方と向き合う中でその方を知り、障がいを知り、利用者の方からも学んでいく、このような土壌が今日の「盲重複障がいの専門施設」である光道園と、職員を「育む」環境の原点となります。

一人ひとりの可能性を広げる環境を「育む」

中道園長が職員に話していた言葉に「環境は人をつくり、人は又環境をつくる」があります。どんなに優れた素晴らしい人でも、環境が悪ければ感化され、能力を発揮できないという弱い面を持っているのではないかと。「一人ひとりを大切にする」ということは、その人にとって十分に力を発揮できる環境が必要だ。光道園を創設し、職員を育てる実業家としての面と、自らも全盲の当事者としての面を持つ中道園長は、誰よりも利用者の方の立場に立ち、自身の経験も伝えながら利用者の方と接する際の考え方、そして設備がいかに大切であるかを伝え続けました。

ライトセンターの建物の廊下や階段、居室の整備にも中道園長の知見が随所に現れ、視覚に障がいのある方、肢体不自由の方が自然な形で生活できるよう細心の注意が払われ、工夫が施されました。



ストーリー

1957

園」の原点 環境～



利用者の方同士が憩う「においとリズムの庭園」

“ 本人が、障害を忘れられる状態にすることだ。現に自分が盲であることを普段殆ど忘れていて。皆んな同じような立場だという想いをしている。だから、この盲重複と言われるこの人達をも、その状態においてあげる事だ。それがその人を明るくする事であり、その人を進歩させていく大きな力になるのじゃないか。そういう環境、条件づくりが大切だ。

『“生きる、— 中道益平のあゆみ —』1977年(昭和52)より ”

その「障害(がい)を忘れられる状態にする」最たる例が「においとリズムの庭園」の建設でした。自らの力で歩けるように手すりを設置し、園内には季節ごとの木が植えられ四季を匂いでも感じられるように。また、噴水の流れる音などが耳を楽しませる。座ると音楽が鳴り出すベンチでは、利用者の方同士が語らえるように。そこには、「施設が居住するだけではなく、憩い、季節の移ろいを感じ、生活の喜びを感じられる場に」という想いがありました。

さらに、施設内には作業場、体育館、温水プール、音楽室、機能訓練室などができて、「働く、学ぶ、育む」環境が整備されました。入所時はほとんど話をする事がなかった人も、やがて笑顔が見られ、人前で歌うようになり、本来の自分を取り戻していきました。

障がい特性を理解し、創意工夫をしながら環境を整える。中道園長の想いは今日の光道園の基本理念となっている「利用者本位の一人ひとりを大切にす支援」の根底となり、また職員育成の土台となっています。

一人ひとりの願いを実現する法人であり続ける

令和4(2022)年、光道園は創立65年を迎えます。今日まで利用者の方、ご家族はもちろんのこと、地域の多くの方々を支えられ、その声に育んでいただきました。

「利用者本位」の支援であり続けるために、利用者の方、ご家族、地域のニーズに応え、サービスや施設を発展させていく。私たちの実践の先にあるのは常に、それぞれの方の望み暮らしの実現です。コロナ禍により大きく変わりつつある社会の中にあっても、私たちは、中道園長から託された「環境は人をつくり、人は又環境をつくる」という言葉を自らに問いながら、「育む光道園」の精神と文化を守り続けていきます。

社会福祉法人 光道園

鯖江事業所

〒916-8585 福井県鯖江市和田町9-1-1

朝日事業所

〒916-0146 福井県丹生郡越前町朝日22-7-1

事業所

- 障害者支援施設 ライトワークセンター
- 障害者支援施設 光が丘ワークセンター
- 障害者支援施設 ライトホープセンター
- 通所生活介護 わかば館
- 障害者支援施設 ライトトレーニングセンター
- 通所生活介護 たねのいえ
- 就労支援事業所 フ・クレール
- 共同生活援助事業所 とらいと・みらいと
- こども支援センター えがお
- 相談支援センター こうどうえん
- 越前町相談支援センター さざんか
- 養護老人ホーム 第一光が丘ハウス
- 養護（盲）老人ホーム 第二光が丘ハウス
- 特別養護老人ホーム 第三光が丘ハウス
- デイサービスセンター さざんかホール
- ヘルパーステーション さざんか
- 居宅介護支援事業所 さざんかホール
- 在宅介護支援センター さざんかホール

令和3（2021）年度 年間スケジュール

- 4月
 - ・新人職員20名採用、総勢435名の職員でスタート
 - ・光道園公式Instagram開始
 - ・新型コロナウイルス ワクチン接種スタート
- 5月
 - ・光道園CM「SDGsキャンペーン」放送開始
 - ・越前焼のぞみ工房/陶芸ショップ陶華星 初の出張販売会実施
 - ・広報誌『絆の杜58号』特集「KDEs宣言（新人職員紹介）」発行
- 6月
 - ・藤本前理事長退任、荒木新理事長就任
 - ・年次報告書『光道園レポート2020』発行
 - ・日本自立支援介護・パワーリハ学術大会「優秀賞」受賞
- 7月
 - ・東京パラリンピック 種火採火式を開催
- 8月
 - ・マイボトル運動推進サポーター登録（SDGs貢献）
- 9月
 - ・広報誌『絆の杜59号』特集「"きける"って最高だ。～光道園's プリセプターシップの魅力～」発行
 - ・創立模擬店（鯖江・朝日）開催
- 10月
 - ・同行援護従業者養成研修開催
- 11月
 - ・光道園文化祭開催
- 12月
 - ・後援会向け広報誌『小さな社会85号』発行
- 1月
 - ・広報誌『絆の杜60号』特集「わたしたちのSDGs ACTION」発行
- 2月
 - ・生活支援事例報告会・リハビリ実践報告会開催
- 3月
 - ・Fスクエア・キャリアナビセンター主催「しごとカフェ『知らないのはもったいない！人とつながるシゴト介護職』」参加

公式サイト



採用サイト



Facebook



Instagram

